落とし穴から始まる異世界譚

ドラグーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
落とし穴から始まる異世界譚

【Ｎコード】
Ｎ２７７８Ｚ

【作者名】
ドラグーン

【あらすじ】
都内某所の高校に通う天野光春は補習回避のため、山積していた宿題を一分一秒でも早くやらなければならず、近道の薄暗い道を走っていたら、落とし穴に落ちて異世界に来てしまった。彼の明日はどっちだ。チートなし、ハーレムになる予定もなし。強大な帝国から彼を召喚した王国を救うため頑張る予定です。

第一話 ''Where is here?''

「やりました、成功です！」

彼の耳にふとこんな声が聞こえた。声の主はおそらく女性であろう。しかし、なんだか確証が持てない。何故ならば彼―天野光春の意識ははっきりしていないからだ。そんな中で思い出してみた。自分の周りに人が居たのかを。

徐々に脳の中の霧が晴れてくる。答えはノーだ。彼がいたはずの場所は人通りがきわめて少ない、薄暗くて狭い建物の間の小道だった。そんなところを通った理由は、さっさと家に帰るためである。課題をやらなければならなかったのだ。

これだけ聞けば、彼は真面目な学生なのだろうかと思ってしまうかもしれない。本当のところは、数学の溜まっていた宿題を明日までに全て出さないと快適な夏休みを過ごせなくなってしまうからである。中間試験の数学の点数は、高校に入ってそうそう酷いモノだった。期末試験の範囲も彼にはさっぱり理解ができない。だから内申点で稼いで補習を回避しようと考えたのだった。

日本語にはとても聞こえない話を延々と聞かされるのは彼としても勘弁であり、そうなるくらいだったら、今日くらいは勉学に励もうと思っていた。一分一秒でも長く時間をとるため、普段の帰路とは異なる近道を通ったのである。

現在の自分の周囲を眺めてみると、頭上のガラス窓から明るい陽射しが射している。先にも述べたが、光春のいた場所は薄暗い屋外である。下を見る。きっちり詰まった石畳の地面には魔法陣が白い

何かで描かれていた。二重の円の中に五芒星、円と円の間には定番のルーン文字らしき何か。そして、上半身を起き上がらせた形となっている彼を囲む5、6人の白衣のような、ローブのような服を着て、歓声を上げている、先ほどの声の主を含めた男女。見るからに白人であり、全員先っぽに赤い玉が付いた木製の長杖を手にしている。

直前の記憶が戻ってくる。鮮やかなまでに落ちたのだ、そこの見えない真っ黒な落とし穴に。そしてその後の自由落下。地面に着いた衝撃。

このようになった過程は分かったのだが、納得ができない。そもそも何故見ず知らずの場所にいるのか。下に落ちたのに、真上から溢れんばかりに光と青空が広がっているのか。悩んでいても仕方がない。さっさと帰らなければ、今と似た状況でお勉強という名の拷問を受けなければならない。幸か不幸か、周りの人たちは悪い人には見えない。まあ、彼の直感によるもので、根拠などどこにもないのだが。聞けば親切に答えてくれそうである。

ここで石につまづいた。喜びを炸裂させている人たちは明らかなまでに日本人ではないのだ。白人だ。ひとえに白人といえども、英語を母国語にしている人たちばかりではない。フランス語やドイツ語の人たちだっている。たとえ英語をしゃべっているにしても、彼の英語の成績は数学ほどではないにしても、あまりよくないし、ネイティブ・スピーカーの教師の言っていることやテストのリスニングがまともに聞き取れた覚えがない。

ある程度距離があったり、声が入り乱れているせいで、本当にどんな言語かが分からない。日本語のような、と頭に浮かんだが、そんな訳ないと勝手な固定概念でその考えを捨てる。ただ、跳ねたり、

笑顔を浮かべているので歓喜していることだけは判断できる。まずは英語で尋ねてみた。

「Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ，　ｗｈｅｒｅ　ｉｓ　ｈｅｒｅ？」

ここは何処ですか？　という意味のつもりだったのだが、残念だが違う。正しくは--Ｗｈｅｒｅ　Ｉ　ａｍ？--だ。間違いやすいミスではあるのだが。そんな事とは露知らず、心の中で多少得意げになりながら反応を待つ。

「……すみません、何をおっしゃっているのでしょうか？」

柔和な笑みを湛えて男性の口から放たれたのは、まさかの日本語であった。光春は当然驚いた。日本語に聞こえたのはやはり間違いではなかったようだ。普通に考えれば、ここは日本国内のはずであり、英語が分からない目の前の人たちは日本語が話せるフランス人やドイツ人であるのだろうと考えてみる。だったら、より簡単なことに日本語で尋ねればよい。

「あのですねえ、いきなりですが、ここは何処なんですか？」

少し気兼ねするような感じである彼に対して、先ほどの男性はやはり微笑みながらこちらに向かって来て、光春に手を差し出した。

「ようこそ、ルクシア王国へ。どうぞ」

男性の手を取り、立ち上がった。そこですぐ、後ろにいる人々から拍手が沸き起こった。男性の言ったところからも、どうやら自分は歓迎されているようだと感じた光春なのだが、刹那に気づいた。彼が目を付けるべき点はそこではない。今、目の前の自分よりも背

の高い金髪の男性は何と言った？

「もう一度伺ってよろしいでしょうか？　ここはどちらでしょうか？」

先ほどよりも丁寧に、音程を落ち着かせて尋ねた。しかし戻って来た答えは同じだった。

ここは日本国のはずである。それに彼の知識の範疇だが、ヨーロッパはおろか、世界にそんな国家は存在していないはずなのだ。もしかしたら、面前の彼らは人様の国で勝手に国家を名乗っているのかもしれない。よくよく、来ている服は変だし、魔法使いの如く杖まで持っている。カルト教団の集まりに来てしまったのだろうかとも思案する。

「……何か勘違いをされているようですね。中将殿から伺ったところによれば、あなた様は『ニッポン』という国からいらっしゃったとか。ふむ、ここでは難ですから、別の場所で詳しいお話をしましょう。バートン君は国王陛下に、セドラン君は中将殿に召喚の成功を報告してくれ。残りの者は速やかに持ち場に戻りなさい」

この男性はこの場のまとめ役なのか、喜んでいる各員に手早く指示を発していく。報告に向かうよう命令された男女は返事をしてから背後の扉を開いて去った。他の人々もさっさと散って行った。その場に残されたのは二人だけになった。改めて見直してみると、かなり広い部屋だ。それにしても、なぜ彼は自分が勘違いしていると分かったのか。光春の顔に書かれた文字を読み取ったのだろう。

「改めまして自己紹介をさせて頂きましょう。サミュエル・ボールドウィン、王立魔法研究局第七課課長の職を賜っております。どう

ぞお見知りおきを」

ボールドウィンと名乗る彼は軽く会釈した。光春は第一印象として学者然としたものを感じた。彼の服装や述べたところの役職からではなく、何となくお堅い感じをしているのを感じ取ったのだ。角ぶちメガネでもかけていれば、それはもうインテリな大学教授にしか見えない。ちなみに理系の。

やはり考えが別の行先へ向かってしまう。彼が着目すべき点はそんなことではやっぱりない。『ニッポン（発音が違う）という国いらっしゃったとか』、『召喚』、『魔法』。ここである。彼は海の底から何かが浮き上がってくるような、そんな感覚がしたが、まだそれは手にとれる位置まで達していない。詳しい話をしてくれるそうだ。光春は名前だけ名乗ってから、ボールドウィンの案内するままに着いて行った。

第二話　異世界

扉の外の光景に光春は少し目を奪われた。華美な模様が描かれているわけではないが、ワックスでもかけられたかのようにピカピカ輝いている大理石の廊下と精巧な彫刻がほどこされた壁面が抑えていてもあふれ出る高級感を演出していた。しかも天上には小振りだが綺麗なガラスのシャンデリアが取り付けられている。ヨーロッパの城かどこかかと光春は思った。先ほどの質素な石で出来た部屋とは対照的だ。ドアの外がこのようになっているとは予想がつかなかった。この美しい廊下は、彼は歩いてもいいのだろうかとためらってしまうほど、いや、居ていいのであろうかと思ってしまうほどである。光っているような大理石の廊下を土足で歩けば誰かに怒られてしまうだろうとも彼は思う。

一方、ボールドウィンは気にすることなくどんどん進んでいる。おどおどしている光春に気がついたのか、先ほどと同じく微笑みながら、「豪華かとお思いになるでしょうが、気にする必要はありませんよ」と声をかけた。だが、光春もそんなことを言われたって無理なものは無理である。

そんなこんなで十数分歩くと、途中にある部屋に入ったのだが、そこもやっぱり凄まじかった。金箔の凹凸をつけて彩色した金唐革紙のような壁紙が貼り付けられ、真紅のベルベットの絨毯が床一面に敷き詰められ、その上にマホガニーで出来たテーブルが乗っかっている。それらを温かみのあるランプが照らす。庶民である光春には縁のないはずである部屋だ。一つ一つのものに強烈な個性があるにも関わらず、それぞれが調和していて、全体で一つの芸術品であるように見える。

その部屋には先客がいた。二人はテーブルの傍らにある椅子に座っていた。ボールドウィンは光春に、その向かい側に腰掛けるよう言った。応接間のようになっていて、ちょうど四人分の席がある。

「おや、姫殿下がいらっしゃるとは。王太子はどちらへ？」

ボールドウィンは一礼してから、少女に訊ねた。

「あに……コホン、お兄様なら狩りに出かけましたわ」

流れるような長いプラチナブロンドに真っ白な肌、何より真っ赤な目……ではなく青い目。残念ながら、よく登場するアルビノではなかった。服の上からでも分かる胸の大きさはちょうどいい感じだ。光春的には、今まで見た中でももっとも綺麗だと思える自分と同世代くらいの美少女だった。しかし気になる点もある。その外見は、一見すれば西洋人形を彷彿とさせるのだが、何か粗野な感じを与えるのだ。姫と言われるのも見た目だけなら何の違和感もないのだが。奇妙な印象だ。彼にはその理由が分からなかった。

「ご紹介しましょう。こちらにいらっしゃるのは、エミリア・ラヴィニア王女殿下であらせられます。あちらは王立軍特務部第八課指令ハヤト・アリマ中将です」

「エミリアと申します。どうぞよろしく」

彼女はこちらに向かってそう言った。本当に取り繕っているふうにしか見られない。鳥のさえずりの様な音色の声だ。一方、エミリアの奥にいる日本人と思われる男は何も言葉を発せず、テーブルの上のティーカップを眺めている。それでも日本人がいるということは光春を安心させた。やはりここは日本だったのだと。来ている服

装だってそうだ。ボールドウィンが着ている服は、まっとうに生活していればまずお目にかかることはないであろう変わった格好である。それこそ、彼は魔法云々と語っていたが、ファンタジー作品で魔法使いが着てそうな姿だ。

しかし他の二人は違う。王女というからには派手な装飾がなされた、かさばるようなドレスを身に着けていそうなものだが、着用しているのはチェックのスカートにベスト、それに女性用の短いネクタイである。男の方もスラックスにワイシャツという格好。どちらも現代的である。だから日本だと勝手に確信した。

「天野光春です。あの、申し訳ないんですけど、ご用件があるなら早くおっしゃっていただけると嬉しいのですが。僕も少し急いでいるので」

「有馬隼人だ。ふむ、薄々気がついてはいると思うのだがね、ここは君のいた平和な先進国ではない。地球ではなく、俗にいう異世界だ。帰ることができると君はそれでも考えるか？」

カップの方から光春の方へと、顔を僅かも動かさず視線だけを向ける。背筋が凍ったような感じがした。鷹の目の如く鋭い眼光は黙って話を聞いて頷いていればいいとでも命令しているのだ。いかめしい外見と低い声も相まって実に恐ろしい。こんな感じの人に商品を売りつけられて大損したという話を聞いたが、当時は愚かで情けないと思ったものだ。今なら分かる。本気で殺されそうな雰囲気だ。言葉が出てこない。喉のまえで突っかかっているどころか、反論を生み出す脳自体がコンクリートで無理やり固められたようだ。

「論より証拠、百聞は一見にしかずという。プリンセス、どうかお願いしたい」

「ええ、了承しました。容易いご用ですわ」

エミリアは光春の手前で手のひらを出す。すると、そのすぐ上に火の玉が現れたのだった。光春が驚いたのを確認すると、彼女は得意げな笑みを浮かべて手を握った。それと同時に火も消えた。

「『魔法』だ。本物のな。君にこれが証明できるかな？　こんなもの見せなくとも、底の見えない落とし穴に落ちたら室内にいました、なんてことがあるわけなかろうに。君は召喚されたのだ。この国を救うために」

―――――――――――――――――――――――――――――

有馬の述べる話をまとめると、ここはテラスペムという地球とは別の世界にあるルクシア王国。文明体系は中世ヨーロッパレベルだが『魔法』が基幹技術となっている。これは一部の人間しか使用ができないが、彼らが特権階級と化すことはない。曰く、現国王も使えないとのこと。詳細はまた後日。

王国は、三年前より急速な拡大を続けるゼーランド帝国がいよいよ西の隣国を挟んだところまで迫ってきた結果、防衛策をとらざるをえなくなった。志願制だった徴兵制度を義務化したり、他国と相互防衛条約締結するなど対策を講じてきたが心もとない。そこで、異世界から将来的に強力な魔法使い―ウィザードになり得る者を機械的に判断し呼び出す『跳躍召喚』を発動。光春を含めて十三人が召喚された。衣食住は王国が保証するが、訓練を怠った場合はその限りではない。身分階級もあり、モンスターも存在する。以上だ。

光春が思うことは勝手すぎるの一言に尽きる。人の意思を無視して、知らない世界で戦争の道具になれという。あまりにも理不尽。

「……学校はどうすればいいんですか？　家族とか友達とかは！？　僕に知らない国のために死ねとおっしゃるんですか！？　そんなのあんまりだ！　魔法？　異世界？　ふざけんな！　あんたらインチキカルトに付き合ってる暇はないんだよ！！　さっさと家へ帰せ！！」

光春は声を荒げた。テーブルを拳で叩きつける。こんなにもなったことはいつ以来だろうか。何も考える必要のなかった小学生の頃以来か。ボールドウィンは気の毒そうにしているし、エミリアも申し訳なさそうに彼から目を背けている。しかし有馬は違う。再び瞳はカップの下へ向かった。そこまではいいのだが、代わりにホルスターのようなものから真っ黒な拳銃を取り出し、腕を伸ばして無言でそれを光春の額に当てる。そのまま撃鉄を起こした。

「信じられないしそうしたくないのも分かる。だがな、いずれこうなってよかったと思うだろうよ。黙って言うとおりにしておけ。……もしこのまま駄々をこねるようなら、さてどうなるかな？」

光春は包丁で体を刺されたのかと錯覚する。刃向う力を奪われる。銃のシリンダーには金色のマグナム弾が装てんされている。弾の種類など光春には分からないが、本物であることは全身で理解できた。バタンと椅子に尻をつく。何でこんなものを所持しているのかという疑問も浮かばない。この後は有馬が口にする数々の誓約にただうなずくことしかできなかった。

見たこともないような言語で記された書類にボールペンでサイン

をするよう強要され、エミリアに連れられて部屋を出た光春であった。

先ほどの大理石の廊下の続きを歩いていた。窓からは青々と茂る深い森とその先の山脈までを見渡すことができる。ここが異世界だとはとても納得できないが、心の何処かでは悟っているのかもしれない。冗談だと思っていたら、あんなみっともない行為はしない。ただ茫然と長く冷たい廊下を進み続けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2778z/

落とし穴から始まる異世界譚

2011年12月11日12時45分発行